

---

# 自由きままに異世界記・・・と熊

黒部 愁矢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

自由きままに異世界記・・・と熊

### 【Nコード】

N5673Z

### 【作者名】

黒部 愁矢

### 【あらすじ】

高校一年生だった、主人公は先輩と山登りをしていると、熊に追われることになり。異世界に転生してしまう羽目に。

突然異世界に放り込まれた主人公がそれなりに楽しみながら生活して、のんびりと元に戻る方法は期待せずに探す物語です。

作者の語彙力が半端なく乏しいため、生暖かい目で「こいつ変な言葉の使い方してやがる」って感じに笑ってやってください(^^; ;

## プロローグ（前書き）

こんにちは、こちらに初めて小説を投稿させてもらう黒部 愁矢<sup>しゅうや</sup>です。

この小説は主人公がのんびり生活するものですが、意外とノリで進む場面もあるはずですので気軽に楽しく読んで頂けたら幸いです。

## プロローグ

「なんでこうなった・・・」

必要最低限の家具しか置かれていない質素な部屋で3歳ほどの少年は子供らしい柔らかな髪をいじくりながら顔をしかめていた。

確か、俺がこうなってしまったのはあの時のはずだ・・・

ある秋の日、高校一年だった俺は先輩と、葉がもう十分に紅く色づいた山道を歩いていた。

「ちよつと 君。もう少し立ち止まって景色を楽しみながら行きましょうよ」

「この景色より頂上の方が綺麗だと思いますが。もしかして先輩はもう疲れてしまったんですか？」

後ろを振り向くと案の定、額に汗を浮かべながら邪魔にならないように髪を一本に後ろでまとめた女性がこちらに來ている。

「そりゃ、運動してこなかったオタクにはこの山道は厳しいわよ」

何故か自慢げに胸を反らした。

「そんなに堂々とオタク宣言をしなくても・・・あ、もうそろそろ頂上みたいですよ」

とりあえず、ボケた彼女を無視することにして前を向くと上に向かう道が途中で消え、視界が開けているのが見えた。それを見ると彼女は、先ほどの疲れたような顔が一遍してパツと明るくなり全力で走り出した。

「全く、ペース配分を考えたら絶対頂上に着いた瞬間に動けなくなるだろ」

独り言を呟きながら歩いていると数十秒後、頂上から先輩らしき叫び声が聞こえた。

急いで先輩のもとへ走っていくと何やら黒い大きな物体が見えた。

（いや・・・まさかとは思うがアレが出たりはしないだろうな。）  
嫌な予感がするが、なるべくその予感が当たらないことを祈りながら先輩のもとに着いた。

そこでは、見事に腰を抜かして一步も動けない先輩とその先輩の2倍はあると思われる熊が対峙していた

見事に予感的中である

とりあえず熊の意識を先輩から逸らすために手近にあった自分の拳より少し小さい石を2、3個拾って、熊の顔目掛けて投げつけた。  
コントロールにあまり自身は無いが、無事当たったようだ。

「おい！ こつちだ！！」

叫ぶとその熊はこちらにゆっくりと振り向いた。と同時にその熊は何か悪いキノコでも食べたのかヨダレを垂らしながらこちらへ俺を食い殺さんという形相で走り寄ってきた。

「先輩！ 俺が時間を稼ぎますので早く山を降りてください！」

「でも 君が・・・」

「いいから!!」

ようやく立つことが出来た先輩が自分の心配をするが叫び返すと、素直にもと来た道を駆け下りていった

・・・

ここまでで一旦思い出すのを止めた。部屋を中心に直立不動で考え込むのは妙だと思ったからだ。ひとまず、ベッドで寝転びながら考えることにした。

確か、ここまでは普通ではなかったが、こうなる原因はなかったはずだ。

「あの後だったかな・・・。確かその次あたりに確か事の発端が起きた気がする」

先輩を山から逃がした後、俺は熊から逃げ続けた。とにかく熊の直線状に入らないように縦横無尽に駆け回りながら必死で山中を逃げ続けた。

すると・・・

「なんで俺らまで巻き込まれてんだよ!!」

「それはこっちのセリフだ!!!」

途中から何故か親友二人が俺の隣と一緒に走っていたのだ。

「折角、お前があのおタクだけど美人先輩と二人っきりで山でデートをするって聞いたから冷やかしてやろうと思って、隠れて見ていたのになんで俺らまで死にかけてるんだよ」

「そりゃあ、その野次馬根性で来た結果だろうな」

俺とバンダナを巻いた親友が軽いきがみ合っていると、その間にも

う一人の眼鏡をかけた親友が声を発した。

「そんなことよりさ、とりあえずあの熊は多分どれだけ逃げても追いかけてくると思うから、あいつを倒す策があるんだけど二人とも聞かない？」

その言葉にいがみ合っていた俺たちは一旦その提案に耳を傾けた。

「おい！　ここでいいのか！」

走り始めて大分経ったろうか。やはり熊は執拗にどこまでも追いかけてきた。そこで、俺たちは策どおりに熊が断崖絶壁に突っ込むように、そこを背に立っている。

「うん。タイミングが重要だから3、2、1で一斉に横に飛んでね」  
策というのは単純にあの熊が突進してくることしか頭がないのを利用して断崖絶壁で待ち構え、ぎりぎり避けて熊だけを落とすという寸法らしい。

・・・それにしてもこの策は本当に大丈夫なのだろうか。

そう悠長に考えている暇もなく、熊が俺たちのところまで後、数秒の時になった。

「それじゃ。　3！」

「2！」

3人が一斉に身構えた。そして後は横に飛べば済むはずなのだが・

・  
「いち！つてえええ！！？」

動かそうとした足が動かなかった。そした更に驚いたことに、顔以外は全く動かなかったのだ。

他の二人も全く同じ状況らしく、突然の出来事に目を丸くしている。

そうして目の前の熊は全く勢いを衰えさせず、突っ込んで俺たち三人は崖に突き落とされた。

「・・・で、この状態か」

俺は今一度再確認した変えようが無い事実に思わず盛大なため息が出た。

「一体俺にこの姿になってどうしろっていうんだよ」



## 現実逃避は無理

「うーん・・・他に何かこれが夢だってことを証明できるものはなにかないのか」

ベタだが頬をつねれば目が覚めるか？ いや、頬が柔らかいってことしか分からんし。

それなら・・・

必死でなにかないものと頭を捻っているとノックする音が聞こえた。っと、同時に勢いよくドアが開かれた。

返事をしようとした瞬間にドアが開いたから、心臓が飛び出るかと思っただじゃないか。

見ると、俺と同じ茶髪を持つ少女がヒョコリと顔を出している。どうやらさっきのはわざとだったようで、俺の予想通りの反応に満足そうな顔をしていた。

「テオ！ 夕食の準備出来たからはやく来ないと無くなっちゃよう！」

「うん、わかったよセリア姉さん」

「よろしい」

俺の返事に満足したのか、ニコリと笑って少女は出て行った。

・・・何故自然に名前が出てきたし。

恐らくこの体の記憶だからなのか、顔を見た瞬間に名前が思い浮か

んだのだ。

セリア・ウイステリア　俺の3歳上の姉、ということは6歳か。さっきの行動から見て思った通り悪戯好きだが、誰にでも優しい？らしい。3歳の頭だからなのか印象がおおざっぱだな。

「そして俺の名前はテオ・ウィルタニア・・・か。覚えやすい名前だよかった」

さすがにこれ以上考えても仕方ないと思い、家族の居る所へ行こうと扉を開けた。

どうやらこの家は2階まであるようだ。そのまま階段を下りていくと家族全員が食卓に着いていた。

そして、俺が席に着くと左目に三本の大きな傷跡をもつ父が口を開いた。あの傷跡についてはなんの情報も思い浮かばないということは子供たちは何も分らないらしい。

「よし、皆集まったな。それじゃあ、”頂きます”」

父の号令に続いて他の四人も手を合わせて言った。どうやら、この食前の文化は同じらしい。

それからは皆、談笑しながら少し固めのパンとブドウを1、2粒食べた。

俺は出来るだけ状況把握をするために会話に聞き入っていた。

そこで気づいた事は  
まず、ここは国の中ではなく村に位置し、農作物を作って税金を領主に納入していること。

そして、識字率はそこまで高くなく、我が家では父と母以外には長男のカーンが文字の読み書きが少し出来る程度だということ。家に本はたくさんあるのは確認したから今度文字の読み方を教えてもらうか。

他にも魔法があつたり、モンスターがいたりなど挙げてみるといくらでも出てくる。

まあ全てをまとめると今いる所は日本どころか世界すら違うらしい。

食事を済ませた後、何をしようかと考えていると真面目な兄からもう寝ろと言われた。

いやいや、あんたも8歳ですからね？俺と5歳差だからそんな変わらんでしょうよ。

姉さんもなんで私はまだ寝ないのよ？みたいな目で俺を見てんですかい。

もついいいや、家の外で情報収集をするのは明日からにして今日は早目に寝るとするか。

## 嬉しい誤算

「・・・目が覚めても何も変わらなかったか」

寝る前にもしかしたらとは思ったが、その期待は儚く散ってしまっただよう。

とりあえず、まだ目覚めきっていない脳を元に戻すために窓から顔を出してみた。

「わあ・・・空気が美味しいとは驚いた」

早朝の冷たい空気を大きく吸い込むと同時に今までは感じたことがなかった空気の味が体にしみわたり、感動して思わず口に出していた。

この世界では地球より環境破壊は進んでないとは良いことじゃないか。

半眼で外の景色を眺めながらそんなことを考えているうちに頭の回転も通常時に戻ってきてから、俺は外を眺めるのは止めて、ベッドの上に座り込んだ。

「さてと、情報収集をするにしてもまず何をしようか」

手櫛をしながら俺は今日の計画を立てていた。

計画を立てるといっても村の状況すら分からないのだから特にこれといったものも立てれないのだが。

それにしてもこの寝癖は中々手強いな。これだと外に出たら恥ずかしいだろう。

もういつそのことしばらく家から出ないで本を読み漁ってみるか。

「・・・本が読みたいな」

「本？」

「うわあ！ カーン兄さん！いつのまに」

突然の声に振り向くと、いつからいたのかカーンが背後に立っていた。

「お前、昨日から少し静かだとは思っていたが、そんなことを考えていたのか」

どうする。まさか俺が本を読むことに対する違和感をなくすための言い訳を考える前にこんな形で来るとは思わなかったぞ。一旦、本を読む気はないと言ってこの場をやり過ぎるか？ いや、それは駄目だ。ここでは学ぶ事をそれほど重視してないのだとしたら、次に本を読むチャンスは一気に減るだろう。ならここは即席の言い訳でカーンに読み方を教えてもらって後は自分で情報収集するか。

「兄さん。ちょっとお願いがあるんだけどいい？」

俺は意を決して口を開いた。転生前ではあまり喋らなかったことがここで悔やまれるとは思わなかったよ。・・・全く上手い言い訳が思いつかない。

「なんだテオ？ 俺に出来ることなら何でもいいぞ」

「うん。僕、最近本を読んでみたいんだけど・・・。兄さん。文字の読み書きを教えてくれない？」

「そういうことだったのか・・・。お前の歳なら外で遊ぶ方が本を読むより良いと思うんだけどなあ」

どうやらカーンは俺に実際の年齢、つまり3歳なら3歳らしく外で遊んでほしいようだ。

俺も出来る事ならそうしたい。転生する前では何度人生をやり直したいと思ったことはいくらでもあるからな。とりあえず人生を自縛霊が成仏する並に満足したい。だがここは日本じゃない。ファンタ

ジー（昨日の夕食で聞いた限りには）溢れる異世界だ。なのだから普通の男子は絶対に興味を抱く。勿論俺もその男子の一員なのだが・

まあ何を言いたいのかというのだ。

・・・俺はこの世界をこころゆくままに堪能したいのだから予備知識を身につけておきたいということなんだよ！！

「ねえ。お願いだよ兄さん。僕、本を読んでみたいんだ」

ここはもう玉碎覚悟でこの3歳という子供ならではの可愛らしい容貌を利用しての愛くるしい表情と少し潤んだ目でカールを上目遣いで見つめた。正直かなり恥ずかしい。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・だめ？」

しばらくカールを見つめていると不意にカールが突然俺の頭をなで始めて、その手を動かすことを止めずに言った。

「可愛い弟のためなら駄目なんてことは有り得ないさ。丁度今日は書斎が空いてるから一緒に勉強しよう」

・・・え？なにこれ。まさかのさっきのが決め手になったって感じなのか？

もしかしてこいつブラコ・・・ま、まあいいや。その辺については

気にしないでおう。

「・・・あ、ありがとう！　兄さん。それじゃあ朝食を食べた後にお願い！！」

予想外の結果に少し変な返事になってしまったが、特に気にもされずにそのままカーンが部屋を出て行ったのは助かった。

「・・・子供の手で意外と便利なんだな」

改めて子供であることの威力を実感した一瞬だった。

「それじゃあテオ。ちょっと読んでみたいと思う本を適当に持ってきてくれないか？　自分が読みたい本の方が楽しいだろう？」

「うん」

俺は軽く返事をして本棚に向かった。約束どおり朝食の後、カーンから文字の読み方を教えてもらうために二人で家の書籍にいるのだ。

そして言われた通り、適当に選ぶつもりで本を見ていたが俺は愕然とした。

題名が日本語で書かれてあるのだ。

目を擦ってもう一度見たが、間違いなく内容も日本語で書かれてある。

（これなら兄さんに教えてもらう必要は無い。適当に読み方は聞き流しておくか）

文字が日本語で書かれたあると分かった以上、最早8歳の男子に16年間分の知識量が備わった俺が教わることなどなにもないだろう。あると言えば常識ぐらいだが・・・。まあそれも本を読んで知って

いけば何も問題はない。

ならなにを選ぶか

意外と本棚には多くの種類の本が並べられてあり、世界の町ごとの説明や、種族、魔法の使い方が書かれているような本がある。本当に使えるかはあまり期待出来そうもないが……。いつか時間があつたら試してみるか。

とりあえず、勘違いされそうな小難しい本じゃなくて、ここは男なら誰しも憧れを抱くであろう武器について書いてある本でも選ぶか。

15

「テオ。選んできたのか？」

「うん。これなんだけど……」

そう言つて俺は特に分厚すぎない程度の本をカーンに差し出した。

「“武器大全”……。少し難しいが大丈夫なのか？」

「うん。大丈夫。文字の読み方だけでも教えてくれればいいよ」

「分かった。なら始めようか」

それから、武器の説明を活用して文字の読み方を教えてもらつて  
いる……。ふりをしていた。実際に内容を見ているうちに日本語と  
全て一致していたから教わる必要が無くなったのだ。



そして、この無意味な講義が終わったのは教わり始めて2時間後のことで、その時には疲れきったカーンの顔と初めて見た武器を目をキラキラさせて見ているテオの顔があったそうだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5673z/>

---

自由きままに異世界記・・・と熊

2011年12月27日21時45分発行